

平成 28 年 12 月 6 日 多賀城市長室にて

菊地健次郎多賀城市長

ポイント

- ◎多賀城という街だから、歴史の重みがある。後世に残していかないといけない。
- ◎東日本大震災があったが、景観、歴史、文化という多賀城らしさを活かした復興を目指すこととして、歴まちをやめるということは全く考えなかった。
- ◎歴まちがあったおかげで、震災からの復旧もうまくいった面がある。
- ◎東北随一の文化交流拠点を目指して、文化度をもっともっと高めていきたい。

聞き手) 平成 20 年に歴史まちづくり法ができて、今年は 8 年目です。この間 60 近くの市町村で取り組みが進められ、地方自治体にとって魅力あるプロジェクトとなっているように見受けられます。私から見て、これらの取り組みには、二つの特徴を感じています。一点は他の都市計画のプロジェクトに比べて、市長のトップダウンの傾向が強いことです。どのまちでも取り組みの前面に市町村長が出てきていますし、歴史まちづくりサミットもその現れの一つです。もう一点はその逆で、地域の人への参加が積極的になされていることです。これには法律の仕組みとして、歴史的風致維持向上計画を策定する際に地域の人々の活動を組み入れていくことが必須で、行政だけではできない仕組みになっていることも背景にあると思います。実際に計画策定の協議会などで伝統産業に従事されている方などと意見交換をしながらプランを練っています。トップダウンの強いリーダーシップの下で、地域の積極的な参加によって進められているというのが、歴史まちづくり計画の特色ではないかと思っています。そこで、トップダウンの責任者である市長がどのような思いで取り組みを始められたかなどについて、直接そのお考えをお伺いし、その結果を全国の自治体にお伝えしたいと考えました。市長の思いを聞かせていただきたいと思います。

1. 歴まちに取り組んだ動機

聞き手) もともと多賀城市では、多賀城という特別史跡があり文化財の施策に取り組まれていましたが、歴まち法ができて早い段階で着手されました。市長の思いを聞かせてください。

市長) 古代日本に同じく政庁があり、友好都市でもある大宰府市が取り組むと聞いたので、本市も歴史を活かしたまちづくりで負けてはならないと思った (笑)。

多賀城という街だから、歴史の重みがあり、後世の方々には残していかないといけないという思いは強い。多賀城にとって、特別史跡があり、壺碑 (つぼのいしぶみ)、興井 (沖の井)、末の松山も国の名勝に指定された。多賀城市では昭和 35 年から発掘調査などを続けてきた。しかし発掘調査は、50 年かけても全体の 10 分の 1 しか進んでいない。あと 450 年しないと全容がわからないのかなどと

議会でも訊かれるくらいですから。古代多賀城の全容の姿が明らかになるのはまだまだ先になる。

歴まち法ができたということで、多賀城も歴史を活かしたまちづくりを進める上で当然これはやらなくちゃいかなのではという思いだった。

経過としては、平成 21 年から計画に着手し、平成 22 年度末に認定を目指していたが、平成 23 年 3 月 11 日に東日本大震災があつて、市民生活の再建を第一と考え、歴まちどころではなくなったが、復興計画では「希望」を持ちながら、多賀城らしさである「歴史」「景観」「文化」を活かした復興を目指すことにしたので、歴まちの取り組みをやめるということは全く考えなかった。



菊地健次郎多賀城市長

震災前から準備し、申請直前で東日本大震災に遭い大宰府に先を越されてがっかりもしたが、まあ競争するものでもないので、職員のみなさんに頑張ってもらっていて、厳しい審査を受けて何回も通って、多くの修正を通じ、震災と同じ年に認定された。何といても歴まちはぜひやってもらいたいと最初から言っていたので、職員が頑張ってくれたということはまぎれもない事実。結果として震災後の貞山堀の修復や歴史的風致形成建造物の板倉の修復もそこでやめていれればできなかった。やって良かったと思う。

2. 多賀城跡の復元について

聞き手) 文化財部局と都市計画部局との関係は、あまりよくない自治体も多いのですが、多賀城市ではいかがですか。

市長) 多賀城市はそんなことはない。発掘するのと都市計画は相いれない部分があるのは確かだが、みんな真剣に対応してくれる。歴史的風致維持向上計画策定も協力して進めてきた。

市職員) 埋蔵文化財のある場所での工事は計画の段階で試掘をやって、その状況でどの面まで発掘するか決まるのですが、計画が中止になる場合も現実にはあります。そのあたりで整合を取っていくことが難しい。

特別史跡内は道路の舗装を補修するだけでも文化庁の許可が必要です。そうした中、建設部門としては事故等が発生した場合に、かし責任が問われることから、早急に補修するなどの対応をとりたいと考えているので、文化庁の許可に時間を要することにもどかしさを感じております。



多賀城跡

聞き手) 南門の復元をされますが、多賀城を復元していきたいというお考えはありますか。
市長) 南門復元は、先々代の故伊藤喜一郎市長が提唱した。当時は今よりも潤沢な資金があって、復元しようとしたが、その後の水害や経済情勢の変化でできなかった。私が市議会議員になってすぐの40歳くらいの時だったので、そこからスタートしていれば、もう30年近く経つので、すべてできていたのではないかと。そのころは10億円くらいあればいいと思っていた。



多賀城南門（イメージ）

今は南門の設計中で、間もなく設計積算が出来る見込み。20億円くらいかかるのではと推計しているが、その半分は多賀城市が持たないといけない。

多賀城は、度々水害に見舞われており、水害に強いまちづくりを進めている。水害対策は、時間雨量52.2mmに対応する施設を作っていかなければいけない。すでに300～400億円はかかっているし、あと400億円くらいかかる見込み。

また、東日本大震災の復興を最優先にしているので、予算的に結構厳しい。本当はすぐにでもやりたい。何か多賀城の歴史的なシンボルとなるものが必要だと思っている。

3. 他地域との連携について

聞き手) 国内での連携はいかがですか。平城京や大宰府は意識していますか。

市長) 日本三大史跡に数えられる太宰府市や奈良市とも多賀城市は友好都市を結んでおり、連携しながらやっている。大宰府には前の市長が友好都市の調印式をやって、私も県議として同席した。大宰府には立派な九州国立博物館がある。

奈良市長とも私が市長になってから話をして、多賀城を見てもらい友好都市になった。平城宮跡は全部国の予算でやってもらっているの、地方自治体にとっては最高の整備手法である。

平成30年春には多賀城の東北歴史博物館で東大寺展をやることになっている。

塩竈市、東松島市、松島町、七ヶ浜町、利府町とは、松島湾ダーランドといって日本三景を超える「世界の松島湾」として『多くの観光客に、より一層楽しんでいただけるような取組みを一緒にやっていきましょう』と始まっている。

平成28年4月に「政宗が育んだ“伊達”な文化」が日本遺産に認定され、仙台市、塩竈市、松島町と連携した取り組みも始まっている。

職員) 松島湾ダーランドではインバウンド対策で、日本の松島から世界の松島へとの考えで松島湾全体を整備していこうということで、レンタサイクルやWiFiの整備などを進めています。

4. 歴史まちづくりの効果

聞き手) 市民の方々の反応はいかがですか。どのように市民が参加してくれていますか。

市長) もともと多賀城市では、市民がボランティアでいろいろな活動をやってくれている。史跡があるまちなので、歴史を生かしたまちづくりを考えませんかというイベントを実施し、一般参加者を募集して、連携を取りながら取り組んできた。

聞き手) 観光や民間の反応はいかがですか。

JRが様々の駅からの「小さな旅」コースを設定しているが、そこで多賀城駅周辺の特集をしている。

職員) 駅長が進めるコースとして、仙石線コースや本線コースをJRが考えてくれ、市も商工観光課で一緒に取り組んでいる。

市長) 政庁の周辺の野球場やサッカー場のある中央公園あたりに、休憩や多賀城のものを販売できる道の駅をつくってほしいという声もある。大きなものでなくてもいいのでお休みどころを作ってあげたい。今は史跡巡りの散策コースをつくっても休めるところが少ないので東北歴史博物館に立ち寄るくらい。



JR東日本 小さな旅 (多賀城)



壺碑 (つぼのいしぶみ)



末の松山

6月下旬から7月初めにかけて多賀城跡あやめ祭りを開催している。政庁の近くでやるので、あやめ園のすぐ側に築地塀を復元してはどうかと提案している。櫓(やぐら)もそのそばにあったことがわかったので、それを復元して上からあやめ園を見てもらうのもいいかなという思いもある。



多賀城跡あやめまつり

また、スマートフォンやタブレットで「歴なび」というアプリをダウンロードして史跡を歩くと、政庁とか廃寺の三重の塔とかが実際の景色の中に写る。これは奈良や平安時代の姿が再現される良い仕組みだと思う。これも歴まち事業のソフト開発でできたものである。



市長) 今回の**歴まちがあったおかげで、震災からの復旧もうまくいった面がある。**歴まち事業を使って東北工業大学で板倉の調査を実施してもらった。多賀城にあるのは「繁柱板倉(しげばしらいたくら)」と言って、こういう板倉は全国でもめずらしい。工法は県北沿岸の気仙大工に由来するものだ。小説家の司馬遼太郎は紀行集「街道をゆく」の一節で、板倉の組み方が古代の城柵に似ていることから多賀城の柵を思わしめると言っているが、結構昔からあったのだろう。昔から農家を営んでいる屋敷に相当の数が残っている。みんな物置に使っている。

職員) 板倉は地震による痛みで、解体するかどうか悩んでいる人もいたので、修復の補助が出るというのが保存のために大きかった。10 数件補修を受けている。

市長) 貞山堀の復旧工事で石積みを残していただいた。仙台港から入った津波と塩釜港から入った津波が、多賀城のあたりで両方からぶつかったようで被害が大きかった。

職員) 津波でだいぶ貞山堀の施設はなくなりましたが、その一部を残し、景観に配慮した復旧をしていただきました。



5. これからのまちづくりの方向性について

聞き手) 多賀城市では、まちを活性化するために図書館とツタヤやスターバックスといった民間事業者を組み合わせる新しい取り組みも進めています。これから新しいものと古いものをどう組み合わせっていくのでしょうか。

市長) 歴まちの重点地区として、多賀城跡と塩竈街道、貞山運河と農村集落を指定している。これからは、東北随一の文化交流拠点を目指して、文化度をもっともって高めていきたい。東北本線の国府多賀城駅



再開発ビルA棟 (図書館等)

から出発して、東北歴史博物館もあるし、多賀城廃寺もある。ずっと奥が政庁で、それまでの動線、流れを作っていきたいと思っている。仙石線の多賀城駅には図書館や文化センターがある。多賀城駅の北口広場から、図書館、文化センターまで繋ぐ道を整備する。その間にある国有地の買収も検討しながらどんな形で整備できるか研究している。

この間八戸に行って「はっち」(八戸ポータルミュージアム)を見てきた。八戸の人たちが自分たちの歴史を中心としたまちづくりの、中心みたいなことで、いろんな人たちが参加し、イベントも相当盛んにやっている。文化度を高める意味でもそのような物は必要ではないかと考えている。

聞き手) 中心市街地活性化法で作った施設で、「はっち」(の向かいの開発でブックセンターを展開し、「はっち」とブックセンターを町の中心に育てたいと市は考えている。八戸三社大祭の展示会場として使われています。

市長) もっと大きな夢もあって、東日本大震災をまとめる地震・津波ミュージアムのような場所が必要だろう。東京の国立博物館より北側は国立の博物館がない。大宰府にある九州国立博物館に対抗するわけではないが、日本三大実録に、貞観の大震災の時に多賀城で千人亡くなったという記述もあるので、津波などの恐ろしさを世界に発信するような場所が必要ではないかとも思っている。

聞き手) ありがとうございました。

聞き手：

筒井智紀

国土交通省東北地方整備局建政部長

舟引敏明

宮城大学事業構想学部教授